

“愛光園”の理念と実践の研究

名古屋市立大学人文社会学部

滝村雅人

Takimura Masato

愛光園

小松祐子

Komatsu Yuko

はじめに ～法人及び施設の概要～

かつて糸賀一雄は近江学園での実践を通して、「どんなに重い障害をもっている、だれととりかえることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。…(略)…重症な障害をもったこの子達も立派な生産者であるということを認めあえる社会をつくろうということ」を主張している⁽¹⁾。「愛光園」の後援会組織である「ひかりのさと会」は、この糸賀思想をそのまま設立の趣旨としている。それはひいては、社会福祉法人愛光園全体の設立の趣旨であり、関係する全ての施設での実践の基本理念となっているといえる。そしてこれに基づいて後述するような「基本的な願い」が上げられているのである。

このような理念を掲げる社会福祉法人愛光園は、現在7カ所の福祉関係施設を設置運営しており、その基となった施設「愛光園」は、2003年度から「大府学園（現在大府市立知的障害児通園施設）」の運営も委託され、2006年には1964年からつづいている現在の土地を離れて「大府学園」の敷地内へと新築移転の予定である。

知的障害者通所更生施設「愛光園」の主な変遷については後述するが、1964年に現在の大府市共和町の高台に創設者皿井寿子が多くの人の協力のもと土地を確保したことに始まる。そして1965年に財団法人愛光園として実践を開始し、1972年に肢体不自由児通園施設として、1973年に社会福祉法人愛光園として認可を受けたのである。その後成人施設の必要性から、身体障害者療護施設「ひかりのさと・のぞみの家」（1978年5月）を開所し、1989年に先の肢体不自由児通園施設「愛光園」は知的障害者通所更生施設「愛光園」として新たな展開をみせたのである。今後は前述したように知的障害児通園施設を併設することによって、さらなる展開を目指しているのである。今日、社会福祉法人愛光園が設置運営する施設には以下のようなものがある。

- ・身体障害者療護施設「ひかりのさと・のぞみの家」（1978年5月）
- ・知的障害者入所更生施設「まどか」（1985年4月）
- ・知的障害者通所更生施設「愛光園」（1989年4月）
- ・身体障害者通所授産施設「ひかりのさとファーム」（1999年4月）
- ・身体障害者福祉ホーム「びわの木」（1999年4月）
- ・知多地域障害者生活支援センター「らいふ」（1997年4月）

- ・老人保健施設「相生」（1996年10月）
- ・その他 身体障害者短期入所事業、知的障害者短期入所事業、障害児者地域療育等支援事業、重症心身障害児（者）通園事業、知的障害者生活ホーム（仲間の家、みづやホーム）などの各種事業やグループホーム等多数にのぼる。

1. 研究対象と研究目的及び方法

（1）研究対象

今回研究対象とするのは、上記の各施設のうち社会福祉法人愛光園発足の基盤となった知的障害者通所更生施設「愛光園」である。

（2）研究の目的及び方法

「愛光園」は、前述のごとく2002年で37年の歴史をもつ施設である。この歴史は、わが国の障害者福祉対策の歴史でもあり、ひいては愛知県における障害者福祉対策充実の歴史でもある。この施設は愛知県下で初めての重度・重症障害者の通所型施設として発展してきた。その実践レベルの高さは高く評価されており、それは創設者であり初代施設長の皿井のみならず現施設長の廣瀬治代をはじめとした、愛光園職員全員の絶え間のない努力と献身的な労働、そして多くの賛同者によって支えられてきたのである。

本研究は、歴史的に愛知県の障害者福祉対策の進展に大きな役割を果たしてきた「愛光園」が新たな出発の時を迎えるにあたって、これまで「愛光園」が果たしてきた社会的役割を明らかにするとともに、その実践の理論的裏付けを行うことを通して、これまでの運動や実践を検証し、その問題点と今後のあり方を探ることを目的としている。

（3）研究方法

法人及び施設の設立やそこでの実践はその法人・施設の持っている創設の理念と無関係ではない。したがって、法人全体と施設の理念に具体的な運動・実践を照らし合わせる作業が必要となる。

「愛光園」はかつての糸賀一雄の実践理念を継承しつつ独自の理念を構築し、それを運動や実践によって具現化しようとしてきたのである。そこでは、前述した糸賀の理念をもとに「基本となる願い」として以下のような具体的な実践理念が掲げられている。

- 「1. 障害があろうとなかろうと、人間として生きることの尊さをみつめ、お互いに助けあい、許しあいつつ、共に生きていこうとする人々の集まりであること。
1. どんな重い障害があっても、その人にふさわしい住居や設備・働き・生き方を考え、各自の自己実現を、より豊かなものにしていく。
1. 自給自足を基本的な生き方として、手づくりの心を忘れずに、ぜいたくをせず、無駄使いをつつしみ、物を生かしきる生活をする。
1. 経営者と労働者、管理者と「収容者」（「」筆者）、という対立は、一切なくし、共に生きる者として同じ立場に立って考えあっていく。

1. 理想をめざして、お互いの意見を語り合い、謙虚な気持ちを持って実行していきたい。
1. 各人の信仰・思想は尊重し、個人の生活も大切にしていけるが、ひかりのさとの住人としては、すべて白紙の状態理想にむかって共に歩む。
1. ひかりのさとの、単なる閉鎖的な小社会になってしまうのではなく、地域社会とのつながりを持ち、人間社会の一つの理想として輪をひろげていくことのできる中核としてゆく。」（「ひかりのさとの会」趣意書より）。

この「基本となる願い」は法人愛光園の後援会組織である「ひかりのさとの会」のものであるが、法人全体の基本的理念である以上、「愛光園」の運動や実践もこの理念に規定されていることは当然である。したがって、今回の研究においてもこの法人の理念に照らし合わせて、「愛光園」の具体的な運動・実践を検証することになる。

そこで研究の展開としては以下のような柱が考えられる。

まず第一に、社会福祉法人愛光園全体の基本的な設置及び実践理念を明らかにする。

第二に、それに基づき、「愛光園」を中心に、社会福祉法人愛光園と各施設の設立の契機及び経緯について、歴史的に明らかにする。

第三に、「愛光園」のもつ独自性に着目しつつ、その運動・実践内容を整理し、設立理念との整合性を検証する。具体的には、個々人に対する個々の実践の検証である。それは、実践の歴史的な変遷も含めて今日の実践が、「愛光園」の理念のどの部分の具現化なのか、あるいは、個々人に設定された到達目標とそれに向けての実践内容の検討である。

そして第四には、後援会組織としての「ひかりのさとの会」のあり方の検証である。「愛光園」は、その設立には保護者を含む多くの人々の協力があつた。それが団体としての機能を持つ基盤であつたといえるが、この設立の経緯が組織の性格を規定することから、「ひかりのさとの会」が、真の意味で運動体としての機能を有してきたのか、あるいは相互扶助的な機能であつたのか、そして今後どのような役割を担うべきなのかを明らかにしていくものである。

このような段階的な研究の展開によって「愛光園」の運動・実践の検証を行うものである。

2. 「愛光園」の変遷

「愛光園」は愛知県内の施設ではあるが、今日までの実践の展開を振り返ってみると、それはわが国のその時々時代の情勢に規定された社会福祉政策の展開から自由ではありえなかったことが理解できる。

「愛光園」設立までの経緯については、その生みの親である皿井寿子の著書『光をみつめて－愛光園の20年』（風媒社）に詳しく著されている。

皿井は、1950年代後半、名古屋市内の乳児院で保母として働く中で、肢体不自由児施設の見学などを経て、重症の障害を持つ子ども達が何も支援がない中でくらしていることに衝撃を受けたことから、1ヶ月間脳性マヒの子どもを預かり、その子ども達の変化に感銘を受けたのが始まりといえる。その後数名の子ども達とともに止揚学園に行き、障害児への関わりについて勉強する

ことになるのである。やがて、止揚学園を退職した皿井は、名古屋市内のアパートの一室を借り受け脳性マヒの重症障害児を受け入れる一方で、恒常的な場所を求めて資金集めと土地探しを始めるのである。そこで手に入れたのが現在の「愛光園」の土地であった。「愛光園」の設立に向けて、皿井自身が奮闘努力してきたことはもちろんであるが、皿井自身が述べているように、不思議と必要な時に必要な援助を申し出る人々がいたことが、この実践の基盤を形作ることができたもっとも大きな要因であったといえる。

さて、こうして1965年に「愛光園」は産声を上げ、布目雅裕君を最初の入園者として受け入れるのであるが、後に皿井は、活動を始めた当初のことを「どこへも行けない重い障害をもった子供達のために、せめて遊び場だけでもと願って始めたのですが…(略)…子供達に教えられ、突き上げられつつ夢中で過ごしてきた」⁽²⁾と回想している。

1950年代後半といえば、高度経済成長への足固めが行われる時期であり、愛知県下においては、豊田自動車を中心とした自動車産業の振興がめざましく、鉄鋼業の展開によって東三河臨海工業地帯の形成が始まる時期である。こうした高度経済成長の展開のなかで、1960年代に入ってようやく重度・重症障害児問題が政策課題として議論の遡上に上ってきたのであり、全国的に重度・重症障害児への取り組みは著についたばかりであった。小林提樹の島田療育園、糸賀一雄のびわこ学園などの実践が始まり、1963年に重症心身障害児施設が法的根拠を与えられるのである。愛知県内では「こぼと学園」が1968年に開所しているものの、その他にはこのような重度・重症障害児の施設は皆無に等しい状態であった。また障害者運動が盛り上がるのも1960年代であるが、名古屋で全国初の共同作業所「ゆたか作業所」の設立は1969年であり、その後に東海地方の障害者運動の牽引役を果たしてきた「ゆたか福祉会」が設立されるのである。このように全国的にもまた愛知県の動向からもわかるように、「愛光園」の皿井の実践は、そこには宗教的慈悲心がその主体的契機であったとしても、少なくとも社会的には先駆的な運動・実践であったことは疑う余地はないのである。

1970年代に入り、「愛光園」は第一の節目を迎える。それは、肢体不自由児施設としての認可を受けたことによって年長児問題が顕在化してきたこと、さらに社会福祉法人愛光園として法人認可を受けたことによって、成人のための施設づくりが構想され後援会組織「ひかりのさとのかい」が設立されることである。自給自足ができるような、施設でない施設を作りたいという皿井に感銘を受けた日高昇が6万坪におよぶ土地を提供したことによって、皿井らの念願であった成人の施設づくりの構想が現実味を帯びてくるのである。

第二の節目は1980年代初頭である。1979年の養護学校義務制の実施がその契機となっている。この当時肢体不自由養護学校は名古屋と岡崎にしかなく、「愛光園」や保護者が大府養護学校に肢体不自由児学級を設置するよう運動を展開し、その結果、肢体不自由児学級の設置が認められ、利用者の大府養護学校への通学が保障されたのである。これによって「愛光園」の利用者像に変化があり、低年齢化することによって早期療育の必要性がますます認識されることになるのである。この間に身体障害者療護施設「ひかりのさと・のぞみの家」が完成し、「愛光園」の卒園者

が入所する。さらに知的障害者更生施設「まどか」が完成し、知的障害者の入所施設が登場するのである。

第三の筋目は1980年代末である。児童数の減少や心身障害児療育のセンター化によって莫大な費用がかかるようになり、こうしたことを契機に成人施設へとその性格を転換し、ここに知的障害者通所更生施設「愛光園」が誕生するのである。児童の施設から成人の施設への転換であった。

第四の節目は1990年代初頭である。この時期はわが国の障害者福祉対策自体が大きく方向転換する時期であり、それは施設福祉中心の政策から地域生活を志向する方向への転換である。「愛光園」の実践もこれらの動きと無関係ではなく、利用者の地域生活支援という視点での生活ホームやグループホームの設置へと動くことになるのである。この動きは「ひかりのさと・のぞみの家」及び「まどか」においても同様であった。「愛光園」としては、1995年に「知的障害者生活ホーム・仲間の家」を開所する。利用者の地域生活支援ということでは当然の実践であったといえるが、制度的には愛知県の地域生活援助事業を利用したものであり、この制度が重度・重症障害者を対象としたものではないため必要な職員配置がままならず、結局「愛光園」職員がさらなる労力を提供しなければならない状態になるのである。そしてこのような地域生活支援の実践基盤として開所したのが、知多地域障害者生活支援センター「らいふ」であった。国や愛知県に申請したもののその結果如何を問わず、法人愛光園の持ち出しを覚悟の上必要に迫られて実施に踏み切ったのである。

さらに、当時新たに始められた重症心身障害児通園制度によって、「愛光園」は、1993年重症心身障害児通園モデル事業をスタートさせる。もともと「愛光園」は、種別としては知的障害者通所更生施設でありながらも、当初から重複障害を持つ極めて障害の重い人達の通所の場として機能していた。このような通所施設は愛知県下では当時「愛光園」のみであり、貧困な愛知県の社会福祉対策の中であって奮闘努力していたのである。その実践の中で、「とにかく、重複障害を持つ人たちが通所でやれる、という確信と、通所させたいと願う保護者が多いという事実を踏まえて、きちんとこの人たちの人権問題として主張し、保障していかなければならないと」⁽³⁾考えていた時に、政策的にモデル事業としての枠の拡大が行われてきたのである。こうして「愛光園」は愛知県からの委託を受け重症心身障害児通園事業を行うことになり、初年度8名の登録で開始するのである。「根本的には、モデル事業を通して、障害の重い方々の生きる場を広げる運動の一環として役に立つ」⁽⁴⁾ことを望んでこの委託事業を引き受けたのであった。知的障害者通所更生施設としては異例であったといえるが、いち早くこの事業を取り入れてきたことは重度・重症障害者の地域生活支援という点で大きな意味を持っていたのである。

第五の節目は、1990年代終わりに「愛光園」の活動プログラムを大幅に改正した時といえる。個々の利用者の主体性と自己選択を基本にして個々の希望に添った活動プログラムを組み立てていくのである。こうして今日の愛光園が形作られてきたのであり、その活動の中から地域生活を意識した仲間によって「ギャラリー&喫茶・くじらのひげ」が開所し、地域の喫茶店として、また仲間の社会参加の場として機能している。

以上が「愛光園」の主たる変化であるが、これをより詳細に検討することが今後の課題であり、法人全体の動きと機能関係を明らかにしつつ整理し、そこにある問題を探り出し、今後の施設としてのあるべき方向を考えるものである。また、こうした「愛光園」をとりまく外的条件の整理のみならず、それを基にして、「愛光園」でのさまざまな実践・活動をも、その施設設置理念および実践理念に照らし合わせつつ、実践全体の理論的裏付けを行っていくものである。

以下の表は、こうした研究に資するために、社会福祉法人愛光園が保持する各施設における機関誌やすでに発行している冊子等を利用して作成したものである。今回は紙面の都合もあり「愛光園」の設置・運営に関する部分を中心にしている。未だ記入もれの部分もあるが、前述したような「愛光園」の地域社会との関わりや、これまでの変化を見て取ることができる。今後はこれをもとにして、具体的活動や各施設の動き、関係した団体・人物も含めた年表を作成し、法人全体の動向を明らかにしていくものである。

なお、この表は以下のような資料を利用して、主として小松祐子が作成したものである。

- ・「愛光園だより」創刊号～
- ・皿井寿子『光をみつめて』風媒社1986.7
- ・愛光園『かがやき－愛光園五年間の歩み』1995.11
- ・愛光園『丘の上から－愛光園十周年記念誌』1999.9
- ・ひかりのさとの会『ひかりのさと－ひかりのさとの会20周年記念誌』1994.5
- ・社会福祉法人愛光園『共に生きたい－田んぼから吹く風に愛と夢と祈りをのせて』1998.5

<註>

- (1) 糸賀一雄著作集刊行会『糸賀一雄著作集Ⅲ』日本放送出版協会 1983年6月 112頁。
- (2) 皿井寿子「近況報告」『愛光園だより』第23号 1976年4月 1頁。
- (3) 広瀬治代「愛光園の歩みから」『AJU愛光園だより』第73号 1994年1月 7頁。
- (4) 広瀬治代「前掲著」 7頁。

社会福祉法人愛光園のあゆみ

年	月	沿	革
		「愛光園」のあゆみ	「ひかりのさと・のぞみの家」「まどか」「ファーム」「GH・生活ホーム」「らいふ」のあゆみ
1955(昭和30)年頃		〈皿井寿子〉 1ヶ月間、脳性麻痺の4歳児(布目雅裕君)を預かる マッサージ師の資格を得る 重度障害の子ども達のために、ある家庭を解放してもらい、昼間保育を始める	
1964(昭和39)年	当初	名古屋に戻り、アパートの一室を借りて雅裕君を中心に脳性麻痺の子どもを預かる	
	2月	土地探しと資金集め開始ー借金の依頼行脚 東洋陶器会長の江副孫右衛門に資金の半分の援助を受ける	
	4月	現在の愛光園の土地を入手する	
	9月	募金の趣意書作成し、遠方の友人、近くの見知らぬ方などに、呼びかける 豊橋の中尾建築会社が、建物の建築を無期限で格安で引き受ける 光に満ちた暖かいこの場所に建つ家を胸に描き、愛光園と名付ける 八畳二間、トイレ、風呂場のプレハブ完成ー300坪の畑に17坪の建物	
1965(昭和40)年	4月	愛光園開園、入園者は布目雅裕君	
	5月	近所の人から植木、大工から訓練用のイス、布団屋から布団の寄付 財団法人の認可が下りる 送迎に必要な車(コ罗纳中古)を入手する 車入手の世話をしてくれた久田さんー以後無料で修理をしてくれる 週2回あゆみの箱のグループがボランティアで来園するようになる	
1966(昭和41)年		来園児数1日平均5.6人となるー本格的な訓練室の必要性 (皿井の)妹の友人の村岡京子と一緒に住みこみで援助 竹中工務店の会長である竹中藤衛門氏に訓練室増設のための協力依頼 竹中工務店の名古屋支店が無料で設計図を作成 日本自転車振興会へ補助金申請	
1967(昭和42)年	春	日本自転車振興会補助金申請認可ー厚生省が認可施設でないという理由で認可せず	
	5月	訓練室設計図再作成 訓練室増設のため隣地の松林購入 園児21名、地区別には名古屋市6名、半田市1名、刈谷市5名、知立市2名、豊明町1名、上町1名、大府市5名。交代制で1日10名ずつを迎えに行く 5月中の来園者 中京地金大島社長婦人、地元の共和病院加藤院長婦人と 中村事務長さん、大高の長田電気製作所の常務都筑氏夫人、名古屋の中央教会の田島牧師、武豊の杉石病院の牧野事務長 あゆみの箱から通園バス寄贈ーともだち号 名古屋西陵高校生8名、地元の中部化繊工場の寮生代表4名が奉仕作業。中部化繊の寮での愛光園のため募金箱	

	10月	訓練室の起工式	
1968(昭和43)年	4月	訓練室の竣工式	
		建設資金のための募金活動継続するも公の補助金はなし。大口の寄付も免税対象とはならず	
		建設資金の為に名古屋友の会、名古屋国際婦人クラブによるバザーなどの純益金の寄付	
1969(昭和44)年	5月	通園児35名。1日交替で送迎。職員数5名	
		数名の方が週に1度ずつお手伝いに来てくれる	
	7月	布目雅裕君(15歳)、高瀬勝巳君(3歳)永眠	
		大府小学校の4年生の男の子が、1ヶ月働いた新聞配達のお金を封もきらずに置いていつてくれる	
1970(昭和45)年	5月	第2期工事(給食室・入浴室)完成	
		給食実施に当たり刈谷と名古屋の主婦が奉仕。食器は日本食器が提供	
	11月	園児27名、1日交替で10数名ずつ車で送迎。満2歳から15歳までの男12名、女15名	
1971(昭和46)年	8月	父母会一ひとりひとりの将来について話し合う	
1972(昭和47)年	4月	肢体不自由児通園施設として認可される	
		措置費一人一日401円。入園許可を受けた児童数27名	
		医師の外山吟子、看護婦の小田みつ協力	
	9月	在籍児31名。歩行訓練、室内でのグループ遊びに中京女子大生や同朋大の学生が手伝い始める	
		父母会一措置費だけではまかないきれない現状を話す	
	年末	年末に県より年末慰労金一人1万9千円	
		年末に大府ライオンズクラブ プレハブ勉強部屋寄付	
1973(昭和48)年	1月	厚生大臣から社会福祉法人愛光園の設立認可を得る	
	4月	看護婦として木村房子、吉沢千代子が職員として加わる。職員は10名	
		施設訪問指導開始。学齢児は名古屋養護学校に学籍。学齢児19名	
		子どもたちの手による自治会「つくしの会」発足	
	8月	この頃から職員会で年長児の問題が話し合われる	
	9月	父母会→親たちが愛光園のような施設を地域につくり原動力となってほしい	
1974(昭和49)年	1月	園児40名、職員9名	＜ひかりのさと＞「ひかりのさと」設立趣意書。日高氏が東浦町の6万坪に及ぶ農場を無償で提供
	2月	初めての県の監査	
	3月	野畑秀弘君、鶴見とし子さん中学部卒業	
	4月	愛光園までの坂道が舗装	
		県からの補助金として重度児一人あたり一ヶ月4324円となる。また1974年度から民間施設運営費がもらえるようになる。平均給与4万円から8万円へ	
		子ども19名と日高農場へ	
	9月	はじめてのバザー開催。純利益42万9874円	
1975(昭和50)年		つくし会愛知支部、地域婦人会、町内会などの協力	

1976(昭和51)年		金城学院中、高浜高校、刈谷北高校での自発的バザー純益金寄付、大府市課長からの積立金寄付	<ひかりのさととの会>会員数1000名
1977(昭和52)年	4月	御下賜金	
	5月	共長公民館で愛光園バザー 純益金86万円はひかりのさととのぞみの家の建設資金に	
		共長公民館館長、大府市社会福祉協議会、大府市ボランティアグループ「しずくの会」の協力	
1978(昭和53)年	10月	理事長皿井伍平氏永眠	
	3月	はじめての卒園式。19歳以上の子9名が5月開所の「ひかりのさと・のぞみの家」に入所することとなる	
	4月	愛光園園長一廣瀬治代 在籍児3～20歳まで34名	<ひかりのさと・のぞみの家>「ひかりのさと・のぞみの家」完成。敷地面積6856平方メートル、建築面積 2125平方メートル、建築総工事費 2億8180万円、初度調弁費 2千万円。施設長一皿井寿子
	5月		<ひかりのさと・のぞみの家>「ひかりのさと・のぞみの家」での19名の共同生活が開始
	8月	養護学校義務制実施通達	
1979(昭和54)年	3月	大府養護学校に肢体不自由児学級の増設が認められる	
	4月	教室建築工事開始	<ひかりのさと・のぞみの家>男性職員3名、女性職員5名加わり、職員総数32名に、入所者31名
		学齢児：毎日通園、幼児：火木土通園、水曜1時帰りとなる	
	9月	新教室落成式 親睦会兼教室完成パーティー	
	12月	愛光園・のぞみの家合同職員会	
1980(昭和55)年	3月	卒園式 卒園生19名うち18名が大府養護学校(4月より肢体不自由児学級開設)へ	
	9月	愛光園・のぞみの家合同職員会	
	10月	ひかりのさとと保育園児との混合保育開始	<ひかりのさと・のぞみの家>職員宿舍地鎮祭
1981(昭和56)年	1月		<ひかりのさと・のぞみの家>例会にて授産ホームについて親たちが話し合う
	3月	卒園式 卒園児14名	
	4月		<まどか>職員宿舍竣工式 まどか(女性宿舍)一授産ホーム、鹿塩一保育室、ともしびの家一集会室や作業所等として活用することに
			<まどか>重度の知的障害者のための未認可施設「生活ホームまどか」が7名の住人と3名の職員で開所
	5月		<まどか>授産グループ「生活ホーム」がスタート
1982(昭和57)年	3月	ひかりのさとと保育所との合同卒園式 卒園児3名	
	4月	入園児2名 混合保育週2回から4回へ	
	9月	温水プールでの水中機能訓練開始	
1983(昭和58)年	1月		<ひかりのさと・のぞみの家>廃品回収に力を合わせる
	3月	卒園式 卒園生7名	

1984(昭和59)年	4月	入園児5名 在籍児童20名	
	9月		<まどか>「まどか」の建設にむけて1984年度の日本自転車振興会の補助金申請
	12月	クリスマス会 ひかりのさと保育所と合同 日本キリスト教団愛知婦人会、友の会、東海警察署、大府遊技場組合、山本皮工芸教室によるクリスマスプレゼント	
	3月	合同卒園式 卒園児6名	
	4月	在籍児 21名	
	5月		<ひかりのさと・のぞみの家>「ひかりのさと・のぞみの家」創立10周年を迎える。10周年記念式展
	6月		<まどか>「まどか」日本自転車振興会補助金決定
	8月		<まどか>知的障害者の施設「まどか」の建設はじまる
	3月	卒園式 愛光園8名 保育所2名	
	4月	豊田寿子の尽力により、豊田自動車をはじめ、中部財界より多額の寄付	<ひかりのさと・のぞみの家>「ひかりのさと・のぞみの家」職員5名加わる
1985(昭和60)年			<まどか>精神薄弱者更正施設「まどか」の竣工式・開所式 定員40名
			<ひかりのさと・のぞみの家>ユニー・ラブラ出店検討委員会発足。ともしびグループ発足
	7月		<ひかりのさと・のぞみの家>月1回 ディサービス開始。第1回 ユニー・ラブラ出店
	3月	卒園式 愛光園7名 在園期間1名が5年6ヶ月 他6名は2年余りから1年余り、ひかりのさと保育所1名 児童数の減少化	
	4月		<ひかりのさと・のぞみの家>ディサービス7名受け入れ開始(火水木)
			<まどか>利用者36名、農作業・織物・学習班に分ける
			<ひかりのさと・のぞみの家>ともしび委員会が発足する
	7月		<ひかりのさと・のぞみの家>皿井寿子『光をみつめて』を出版する
	10月	ピアノ贈呈感謝式 ローベル会、愛知機械労組の5年にわたるベルマーク運動協力	
	11月	愛光園20周年記念講演及び同窓会開催	
1987(昭和62)年	2月		<まどか>「まどか」の織物が活況
	3月	江副石尾理事、内藤康子監事辞任 卒園式 愛光園園児 8名、保育所園児 2名	
	4月	肢体不自由児通園施設として運営難(幼児の減少、心身障害児の療育センター化による高度な専門性、それにもなう莫大な費用)、就学後愛光園に戻ってくる子どもたちの増加(今年度はともしびグループとしてディサービスの延長として受け止めることに)→1, 2年後に成人施設へ 転換のとき	<ひかりのさと・のぞみの家>渥美の荒木さんの協力でパソコンがプログラムにおいて活用される
		年齢分布 0～1歳児 4名、2～3歳児 8名、4～5歳児 8名、計20名、地域分布 安城・刈谷・知立方面 10名、名古屋・豊明・日進方面 5名、東浦・大府方面 5名 3グループ(リズム・感覚・表現)と個人指導(作業・言語・視覚)	
		ともしびグループディサービス(昨年度は不定期→今年度毎日)開始 12	

		名 18～25歳、ナイト・ケア・トレーニング（NCL）実施	
	5月		<ひかりのさと・のぞみの家>手づくりパンに挑戦する共同購入委員会
	8月		<まどか>自動車労連から乗用車寄贈
1988(昭和63)年	4月	1歳児1名、2歳児4名、3歳児2名、4歳児4名、5歳児3名、6歳児1名 男児10名、女児5名、計15名 「療育の基本の願い」：一人一人の子どもの自己実現をめざし、その子なりの可能性を最大限に引き出すための療育目標に向かうと同時に肢体不自由児施設愛光園としての最後の療育に、親・子・指導者の力を結集して共に歩みます	
	5月		<ひかりのさと・のぞみの家>「のぞみの家」開設10周年を祝う
	9月	ロータリー、本館の大改修工事開始	
	10月	「ミクニパン」からのパン釜など器具一式の寄贈	<まどか>パン小屋完成
			<まどか>高橋氏（ひかりのさとの会員）の口添えで霊友会事務所新設に伴う、既存の建物の移築→自活ホームとして活用
			<ひかりのさと・のぞみの家>朝日新聞名古屋厚生文化事業団設立50周年記念としてノンタッチキーボードとパソコン寄贈
			<ひかりのさと・のぞみの家>名古屋国際婦人クラブ35周年記念としてノンタッチキーボードとパソコン寄贈
			<まどか>日本自転車振興会の補助金によってスプリンクラー設置
1989(平成1)年	1月		<ひかりのさと・のぞみの家>豊田光の家を支援
	3月	合同卒退園式	<ひかりのさと・のぞみの家>養鶏農場建設案を提案
	4月	精神薄弱者通所更正施設愛光園開所式 10市一町から19名が通所	<ひかりのさと・のぞみの家>個人外出制度変更、電動車椅子の練習(12名)
		ナイト・ケア・トレーニング開始	
	5月		<ひかりのさと・のぞみの家>創立15周年を迎える
	6月	かきつばた鑑賞(東海市)	<ひかりのさと・のぞみの家>会報「ひかりのさと」の100号発刊
1990(平成2)年	1月		<ひかりのさと・のぞみの家>歌集 ほたる草 ひかりのさと・のぞみの家五人集
			<ひかりのさと・のぞみの家>ショートスティ用居室の増築工事(～3月)
	3月	療育グループ終了 はばたきの会(8名が「豊田光の家」へ入所)	<まどか>養鶏場にひな入居、A型肝炎発生 住人11名、職員4名の罹患
	4月	生活グループ発足、クラブ活動 開始	<ひかりのさと・のぞみの家>「豊田光の家」が開所する
	5月		<まどか>パン作りがプログラムに
			<ひかりのさと・のぞみの家>例会にて福祉・グループホームの声高まる
	7月	県歯科医師会と大府市歯科医師有志の方々による歯科検診開始	<ひかりのさと・のぞみの家>スプリンクラー工事(～11月)
	10月	地域の商工会主催の「ふれあいフェスティバル」に参加	
	12月	合同職員会 自立に向かってグループホームや地域への働きかけなど、何処にとりくんでいくべきかを話し合う	
1991(平成3)年	2月		<ひかりのさと・のぞみの家>例会にて勉強会を開く
	3月		<まどか>職員宿舎を利用し男女2名ずつ計4名が、朝食作りをしながらの生活開始→グループホームが重要課題に
	4月	措置人数27名、16～39才、平均年齢24歳、知的障害と身体障害を併せ持つ者13名 今年最大のポイント 1. 出席日を設けないこと、2. ナイトケア	

		トレーニングを1泊2日から2泊3日に延長ー将来のグループホーム・ショートステイの土台 大府市勤労会館でのナイト・ケア・トレーニング開始	
	6月	3グループ（遊び・グルメ・ショッピング）に分かれての「お好み外出」開始	
	8月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞ひかりのさとボランティアスクール
	12月	中央競馬社会福祉財団・中京競馬主協会から助成金	＜まどか＞まどかにパン配送用の乗用車
1992（平成4）年	2月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞玄米食を学ぶ
	4月	生活訓練施設「仲間の家 わいわいハウス」（長草町）完成（一保護者からの家の提供）2泊3日の宿泊訓練、レスパイトサービス開始（目標）親子分離・自立への足がかり、保護者や家族への介護援助 戸田和夫氏の好意で借家できる	＜ひかりのさと・のぞみの家＞職員宿舎を使つての自立体験学習開始
			＜ファーム＞「ひかりのさとファーム」（心身障害者小規模授産施設）開所 男性4名、女性2名（うちまどか退所者5名）（概要）実施主体ー東浦町、運営主体ー（受託）社会福祉法人愛光園、事業種別ー愛知県心身障害者小規模授産事業、開設月日ー平成4年4月1日、対象ー原則として18歳以上で心身に障害を有するものであって、職業自立と生活自立を目的とするもの、職員ー専任指導員（2名）、非常勤職員（若干名）、開所日数ー週6日（原則として）、設置内容ー①養鶏事業部 ②パン工房いぶる事業部
			＜GH・生活ホーム＞グループホーム「ひかりのさとホーム（戸田ホーム）」開所 男性2名、女性2名、事業種別ー精神薄弱者地域生活援助事業（国制度）
	12月	ローベル会の協力でベルマークやロータスクーポンでビデオデッキとビデオカメラ購入 NHK教育「明日の福祉」で愛光園のナイト・ケアが放映	
1993（平成5）年	4月	サークル活動発足	＜ひかりのさと・のぞみの家＞身体障害者短期入所事業の受託
			＜まどか＞3名が地域生活移行（退所）
			＜GH・生活ホーム＞グループホーム「ひかりのさと 緒川ホーム」開所 男性2名、女性2名 事業種別ー精神薄弱者地域生活援助事業（国制度）
	5月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞創立19周年を祝う
	8月	第1回3施設（青葉園・愛光園・朋）合同研修会	＜ひかりのさと・のぞみの家＞ボランティアスクール講演会
	10月	重症心身障害児通園モデル事業実施ー（実施主体）愛知県、県より愛光園に一部委託（事業の目的）在宅の重症心身障害児に対し、通園の方法により、日常生活動作、運動機能等に係る訓練・指導等・必要な療育等を行うことにより、在宅の重症心身障害児（者）の福祉増進に資する 広瀬 「施設機能と人権ー当たり前のことを当たり前に」『愛護』	＜ひかりのさと・のぞみの家＞深谷道代、松井タツ子、長沢秀樹が職員宿舎を借りて共同生活スタート 「町の中でふつうの暮らしがしたい」
			＜ファーム＞10名+1名の仲間たちと職員・近親者にて「ほやほやの会」結成（目的）地域での生活を支える会として位置づける 会員が必要とする地域生活に関する学習・資料代・研修等諸費用に使用
1994（平成6）年	1月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞職員 常勤36名・パート6名 定数オーバー
			＜ファーム＞昨年度 約1500万円の売り上げ、仲間10名に対し毎月45000円支給、非常勤の給与も出せるようになる 養鶏部 育雛舎、休憩室、事務

		所増設 パン工房 大型エアコン取り付けにより安定した天然酵母の発酵 →作業環境の整備
4月	生活グループ新グループへ、小グループ(5.6人)での「お好み外出」開始	＜まどか＞加藤俊一施設長就任
		＜ファーム＞山田優「まどか」から「ファーム」の施設長にファームの役割・構想 1. 第2ひかりのさとファーム 2. 地域生活支援センター準備室
5月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞「ひかりのさと・のぞみの家」創立20周年を迎える
		＜ひかりのさと・の会＞ひかりのさと・の会20周年記念誌『ひかりのさと 今までの十年これからの十年』発行
6月	松山市にて「地域生活支援システム研究会－全社協・心身協主催」開催 テーマは「重度・重複障害者のディ・センターについて」 愛光園の実践報告→ 重度重複障害の人たちへの意識・注目、重度重複障害の人たちのための通所の制度もないという、社会的位置づけもされていない状況が公の場で討議されるようになった	＜GH・生活ホーム＞戸田ホーム 一泊旅行へ（恵那峡）
8月		＜GH・生活ホーム＞緒川ホーム 学生などのサポーターによる休日バックアップ開始
12月	愛光園にて重症心身障害児通園モデル事業全国連絡協議会開催→制度化に向けて大きなポイントとなる 作業室、トイレ増設工事開始	
1995(平成7)年	1月	＜ひかりのさと・のぞみの家＞1. ファーム通勤者2名、地域の文化センター等のサークルに定期的に参加している人3名、単独外出、ペア外出8名、無線で交信できる人3名、職員用家族宿舍で自立学習している人3名、AJUで自立体験した人8名、名古屋市内でボランティアに支えられて定期的に自立体験している人1名→ 活動の場を地域に向かって拡大していく人々への援助システムの必要性 2. 平均年齢40歳、年齢構成 30～40才代76%、50才以上20%→ のぞみの家で老いていく人たちに添っていく援助システムの確立の必要性
		＜ひかりのさと・の会＞日高氏 農場のすべてを福祉ゾーンとして活用すること表明 第1の計画として老人保健施設を法人愛光園が設置運営することに 開設予定 1996年10月から
3月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞ひかりのさと 保育所一時閉園
4月	新作業室・洗面所・トイレ完成	＜GH・生活ホーム＞グループホーム新町ホーム開所 事業種別一知的障害者地域生活援助事業（国制度）
	中央競馬社会福祉財団・中京競馬主協会から助成金1200万円	＜ひかりのさと・のぞみの家＞増改築検討委員会が施設長、住人4名、職員6名で発足
	知的障害者生活ホーム「仲間の家」開所（県の地域生活援助事業）認可される→しかし、重い障害を持つ人を援助する制度ではないため、愛光園職員が二重三重に労力を提供しなければならない	＜GH・生活ホーム＞東浦町 5ヶ所ホーム開所のうち3ヶ所が法人愛光園が援助 また他法人のGHの住人がファームに就業 →他団体の連系の必要性
5月		＜ファーム＞「ひかりのさとファームおべんとう屋さん」開業
8月	「生活ホームを考える会」発足	

1996(平成8)年	10月	大府市長と保護者の初の懇談会 一、いつでも安心して託せるレスパイトサービスの場がほしい 一、ロングスティも可能な生活ホームがほしい 一、重い障害の人たちの暮らせる為の援護補助がほしい 一、地域で暮らす障害者の総合的な支援センター機能をもつシステムがほしい	
	11月	『かがやき 愛光園5年間の歩み』発行	
	1月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞東浦町福祉センターがのぞみの家の人のために2つ目の絵画教室を開講
			＜ひかりのさと・のぞみの家＞ショートスティ利用者の増加 1993:138日、1994:244日、1995:466日 利用者の障害の多様化
	3月	リフトカー寄贈(「日本財団」より寄贈)	
	4月	重症心身障害児(者)通園事業として開始→新たな試み 1. 通所利用者の毎日通所保障(定休なし) 2. 緊急時の送迎保障(前エリア) 3. 個々のニーズに応じた援助にかなり重点をおいたプログラムづくり また、病院治療などスタッフ付き添い増加 「生活ホームを作る会」結成、具体的な運動開始 個別お好み外出開始	＜ひかりのさと・のぞみの家＞児童短期入所事業の受託 ＜まどか＞児童短期入所事業・知的障害者短期介護事業(ショートスティ)受託 ＜らいふ＞「知多地域障害者生活支援センター」の活動開始→愛知県・国に申請した状態で(結果如何を問わず必要な事業として)法人予算持ち出しのままセンターの活動開始
			＜ひかりのさと・のぞみの家＞外出範囲別の運転免許制度開始→日中町の中で活動したい人たちが、自由に、少しでも安全に外出できるように
			＜まどか＞自立体験ホーム「まどかの家」さがし開始→ひかりのさとの職員宿舎にて宿舍生活開始
	5月	中学生交流会	
	6月 ～7月		＜ひかりのさと・のぞみの家＞「びわの木の家」にて深谷、長沢、松井「びわの木グループ」緒川の町の暮らし体験→身体障害者福祉ホームづくりへ
			＜ひかりのさと・のぞみの家＞東浦町の深谷勝治、久子夫妻が3人が暮らしやすいようにと家を大改造してくれる
			＜ひかりのさと・のぞみの家＞チョン・スヨン「チョン・スヨンを支える会」と自立の家の協力によって毎月6日の自立生活続ける→同朋大学近藤祐昭先生『チョン・スヨンの挑戦』出版
			＜ファーム＞ひかりのさとファームの商品を購入していただいているお客様あてに通信文「かきどおし」夏号発刊
	8月		＜ファーム＞「おべんとうやさん」事業部で東浦町高齢者への食事サービスを委託される
	10月	渡辺聡(行方不明)の母親 ひるがのの別荘地529㎡寄贈	＜ひかりのさと・のぞみの家＞障害児(者)地域療育等支援事業の受託→知多地域障害者生活支援センター「らいふ」
		生活ホーム建設開始	＜らいふ＞「知多地域障害者生活支援センター」→障害児(者)地域療育支援施設事業として認可 県から事業委託 指定施設「まどか」(実際には法人で) 1. 在宅生活をする障害児(者)への療育支援活動 2. 地域生活のススメ運動の展開 3. 24時間生活・介護支援によりレスパイトサービス

			を行うことで、4. 法人のグループホームのバックアップ、グループホームの設置支援の展開
			老人保健施設『相生』 竣工および開所式
	11月		<まどか>自立体験ホームまどかの家「あったか荘」(東浦町内)において地域生活体験開始
1997(平成9)年	1月	生活ホーム「仲間の家」(新築)完成	<ひかりのさと>日高氏の土地寄贈により増改築検討委員会→「新築プロジェクト」へ切り替え、改築補助の県への申請も取り下げる
	3月		<ひかりのさと・のぞみの家>1996年度-1. 町の中で活動したい人たちー福祉センターの絵画教室、図書館の童話サークル、教会での聖書研究会、県主催の人にやさしい街づくりの講座等への参加。町の小、中、高、計9校と社協主催の福祉実践教室に9名参加。緒川小学校の4回連続のオープントム特設講座に6名参加(初)。レクリエーション外出 延べ月平均96人前後、単独外出ー延べ年間788人、職員がボランティアとして同行する外出ー354人、一般ボランティアとの外出ー29名 2. 町の中で暮らしたい人たち8名が自立学習に取り組む(AJUの利用、職員宿舎での共同生活、「びわの木」での町の生活体験。→「びわの木通信」発行。ビデオ「街の中で暮らしたい」を携えて、大学などを回り、ビデオ上映、交流。県主催の身体障害者(児)福祉施設直接処遇職員研修にも講師として参加→『誰でも』『いつでも』くらすことができる身体障害者福祉ホームづくりを目指し、町、県に要望書提出 3. 家族との連携ー高齢化に伴い住人一人一人の将来について、家族と職員で個別の話し合い開始 4. 在宅支援ー1. ショートスティ：409日 2. ディサービス：当施設からの地域生活移行者の利用
			<まどか>ショートスティの登録者54名に 利用者47名、延べ日数300日
			<ファーム>1996年度 事業収入 養鶏部1299万円、パン工房びいぶる1266万円、べんとうや583万円、よい食品652万円、計3800万円
			<ファーム>障害をもった人の地域生活を支援する就労援助の役割をより担うために「通所授産施設」への施設整備を法人に提案、準備活動展開ー日本財団の施設建設に関わる補助金の交付の申請
			<GH・生活ホーム>生活ホーム「うさかホーム」開所 (阿久比町) 男性2名、女性2名 就労者ともちの木園の通所者
	4月	プログラムで個別対応始まる 「なかまの家」開所セレモニー	<まどか>みどりちゃんグループ(最重度グループ) 細分化 <くらいふ>事務所開設、レスパイト・サービスを含めた知多地域障害者生活支援センターの営業開始(ワイワイハウス跡地利用) スタッフ4名 地域4月 2回の在宅支援訪問療育実施
		ボランティアの藤田さんが週2回入ってくれる。積極的に支援の輪作りをしてくださる	
	5月	中学生交流会	<くらいふ>本格的なレスパイト活動開始
	6月		<ひかりのさと・のぞみの家>県への施設設備整備計画(新築計画)申請
	9月	ホームに男性職員加わる	
	11月	愛知県造園建築業協会よりアルト寄贈	

1998(平成10)年	1月	中央競馬馬主福祉財団から300万円の補助金	<p><ひかりのさと・のぞみの家>新築移転について 青写真ほぼ出来上がるが、移転先が農地であるために、その解除が3年後。よって新築移転は財政難もあり先送りに</p> <p><GH・生活ホーム>3GHと2生活ホームの世話人連絡会を毎月実施。さらに法人関係だけではなく知多地域全般に参加を呼びかけた知多地域世話人連絡会(10ホーム参加)を、榎本Dの協力で隔月で実施。まどかが事務局 ひかりのさとホーム→戸田ホーム、ひかりのさと緒川ホーム→緒川ホーム、ひかりのさと新町ホーム→新町ホーム に名称変更</p> <p><まどか>福祉の情報をできるだけ早く届けていくために通信文「知多の暮らし」を発行</p>
	3月		<p><ひかりのさと・のぞみの家>ボイラー取替え工事</p> <p><ひかりのさと・のぞみの家>1997年度-1. 加齢に伴い、全身機能のレベル低下がすすんでいく人達への援助: 吸入器、吸引器、手動式の人工呼吸器、酸素ポンプを整備</p> <p>2. 町の中で活動したい人たち: 福祉センター主催する町の行事、福祉実践教室に積極的に参加。町の障害者計画策定にあたりアンケート調査協力。緒川小学校の生徒の街頭募金により車いす2台贈呈</p> <p>3. 在宅支援: 1. ショートステイ 利用延人313人 2. ディサービス 当施設からの地域生活移行者の利用(週1回の入浴相談等)</p>
			<p><まどか>1997年度 (1)障害児(者)地域療育支援事業 (1. 在宅支援外来療育指導事業 236件 2. 在宅支援訪問療育指導事業 346件 3. 施設一般指導事業 90件 (2)法人GH支援の実施(直接支援、会計処理・医療側面支援) (3)レスパイトサービスの実施(会員50名 送迎サービス 379件、ディ・ケアサービス 515件、ナイト・ケアサービス 88件 利用時間総数7075件)</p>
			<p><ファーム>1997年度 利用者への給料月額3万1千円→障害者年金と在宅手当を合算して10万円以上の収入確保、職員2名、非常勤職員9名</p>
			<p><ファーム>障害者職業センターとしての『障害者職域開発援助事業』を2ヶ月に渡って実施(仲間の職場実習) →一般就労を含めた就労援助の機能も備えていく必要性、「障害者雇用支援センター」の設置が今後の課題</p>
	4月	プログラム大幅変更(さらに個別プログラム化)	<p><ファーム>社会就労センター(通所授産)の建設に日本財団の補助金交付決定。(事業計画)・知的障害者通所授産施設 ひかりのさとファーム・利用定員 30名 以下略、設計は中部自然住宅ネットワーク、建築竹中公務店</p>
			<p><まどか>地域生活支援者ヘルパーの要請講座を実施</p>
	5月		<p><ひかりのさと・のぞみの家>ひかりのさとのぞみの家20周年記念誌『共に生きたいー田んぼから吹く風に 愛と夢と祈りをのせてー』発行</p>
	7月	浴室にリフト設置	
	10月		<p><GH・生活ホーム>グループホーム うさかホーム開所 事業種別一知的障害者地域生活援助事業(国制度)</p>
	12月	インフルエンザ予防接種	<p><まどか>ショートステイの専用居室の増築工事着工 ショートステイ利用者の増加</p>

		中央競馬馬主福祉財団からの助成	
1999(平成11)年	3月	重症心身障害児(者)通園事業送迎バス購入	<ひかりのさと・のぞみの家>屋根葺き替え工事完了
		財団法人車両競技公益資金記念事業団から1024万円の助成	<まどか>3名退所 うち2名がファームへ 町内に暮らしの場確保←10月からGHみずきホーム、森岡ホーム)
			<ファーム>GH3箇所から12名、在宅から4名の計16名 1998年度事業収入3800万円
			<らいふ>1998年度 (1)障害児(者)地域療育支援事業 (1. 在宅支援外来療育指導事業 144回 670件 2. 在宅支援訪問療育指導事業 109回 121件 3. 施設一般指導事業 142回 1950人 4. 地域生活支援事業 (2)法人GH支援の実施(月0回)、世話人研修会(他の法人を含む)の実施(5回)(3)レスパイトサービスの実施(会員65名に対して1776件、5550時間)、(4)本人活動の企画運営の実施(なかよし会 6回、いきいきねっと 年3回)
			<ひかりのさと・のぞみの家>住人2名が介助のボランティアを得て、自分たち中心のツアーを組み、スウェーデン、デンマークの福祉事情の勉強に海外へ
			<ファーム>「障害者職域開発援助事業」実施(仲間の職場実習) → 一般就労へ
	4月		<ひかりのさと・のぞみの家>女性職員の半数が新規採用で出発
			<GH・生活ホーム>身体障害者福祉ホーム「びわの木」誕生→深谷、長沢、松井 のぞみの家退所、びわの木入居、ファームの広報・オフィスプラン事業部「ばくかめ」に勤務、在宅支援事業の対象として認められホームヘルパー派遣される
			<ファーム>知的障害者授産施設「ひかりのさとファーム」竣工式、開所式 (事業内容、経費、資金内訳略) →パン工房いぶる、レストランくるみ、苜舎(農業・食品加工)、ばくかめの4事業部、小規模授産施設「ひかりのさとファーム」→養鶏、べんとうや、苜舎(農業・食品加工)、よい食品の4事業部、「障害者雇用支援センター(準備室)『ワーク』」の設置
	5月		<ファーム>レストランくるみ開店
			<まどか>ショートステイの専用居室「ひまわり」の増築工事完了→ショートステイ登録者130名、年間利用者数760名に
2000(平成12)年	9月	愛光園10周年記念実践研究会発表会、参加者240名 写真集製作のために篤志家から150万円の寄付金	
	10月		<GH・生活ホーム>グループホーム みずきホーム、森岡ホーム開所 事業種別一知的障害者地域生活援助事業(国制度)
	1月		<らいふ>「らいふ」対象 レスパイトサービス75名、GH一直載支援29名、間接支援 8名、仲間の会一約30名、絵画教室一数名、養成講座(2回)一20名、地域生活支援一役100名 スタッフ 専任職員一7名、非常勤一1名、世話人一7名、サポーター一約20名、近所のおばさん一約60名
	3月		<まどか>「自閉症の理解と生活の組み立て」講師を迎えての勉強会
			<ファーム>養鶏事業部一1058万円、パン工房いぶるの事業部一1261万円、べんとうや事業部一186万円、よい食品事業部一868万円、レストランくるみ事業部一845万円、苜舎事業部一205万円、700人以上の固定顧客に機

		関紙「かきどおし」を隔月で発行
		＜まどか＞H11年度 (1)障害児(者)地域療育支援事業 (1. 在宅支援外来療育指導事業 227回 406件 2. 在宅支援訪問療育指導事業 189回 678件 3. 施設一般指導事業 188回 1423人 4. 地域生活支援事業(コーディネーター事業) (2)法人GH支援の実施(月30回)、知多半島の12GHと4生活ホームの世話人研修会(他の法人を含む)の実施(5回) (3)レスパイトサービスの実施(会員75名に対して2178件、7125時間)、(4)本人活動の企画運営の実施(なかよし会 6回)、(5)絵画教室
		＜ファーム＞「障害者雇用支援センター(準備室)『ワーク』→就労援助の幅のひろがり、ピアカウンセリングの形成、7名の一般就労支援、職場定着支援や就職生活相談等鋭意活動→幹旋型雇用支援センターの開設へと前進
4月	「ギャラリー&喫茶 くじらのひげ」開店 喫茶部門にボランティアの吉野さん、大西さん、おかし作りに杉本さん、夏目さん、日比野さんの協力	
6月		＜まどか＞知的障害者相談支援事業、障害児相談支援事業開始
10月		＜GH・生活ホーム＞グループホーム「たつみホーム」「江端ホーム」「みやずホーム」開所 事業種別一知的障害者地域生活援助事業(国制度)
12月	大府市補正予算にて、愛光園グループホーム建設補助金 1000万円助成認められる	
2001(平成13)年	1月	＜ひかりのさと・のぞみの家＞「ひかりのさと・のぞみの家」建て替え代替案として個室を5室増築し居住空間の充実を図ることを検討→人件費からその資金捻出、マネジメントできる施設長の必要性
		＜ファーム＞利用者37名、うちGHや身体障害者福祉ホーム(9ヵ所)利用者28名 在宅者4名週1～2回の宿泊体験 →ボランティアやサポーターからノーマリゼーションの風、自然養豚計画
	3月	＜ファーム＞知的障害者授産施設「ひかりのさとファーム」→パン工房びいぶる事業部-1256万円、レストランくるみ事業部-778万円、筍舎事業部(農業・食品加工)-336万円、ばくかめ事業部-22万円、700人の固定顧客小規模授産施設「ひかりのさとファーム」→養鶏事業部-767万円、べんとうや事業部-245万円、筍舎(農業・食品加工)事業部-61万円、よい食品事業部-940万円。「障害者雇用支援センター(準備室)『ワーク』」→6名の一般就労、20名の職場実習支援、職場定着支援、就職生活相談等鋭意活動実施
		＜らいふ＞2000年度 (1)障害児(者)地域療育支援事業 (1. 在宅支援外来療育指導事業 193回 392件 2. 在宅支援訪問療育指導事業 133回 685件 3. 施設一般指導事業 133回 1367人 4. 地域生活支援事業(コーディネーター事業) (2)法人GH支援の実施(月30回)、知多半島の16GHと3生活ホームの世話人研修会(他の法人を含む)の実施(5回) (3)レスパイトサービスの実施(会員76名に対して2917件、9105時間)、(4)本人活動の企画運営の実施(なかよし会 6回)、(5)絵画教室
2000年度		＜ひかりのさと・のぞみの家＞苦情解決責任者と苦情受付担当者を決め「よろず相談室」を開設

		<ひかりのさと・のぞみの家>ショートステイで児童の受け入れ開始 述べ利用者数672名中78名が児童
		<ひかりのさと・のぞみの家>毎週土曜日看護婦が身障福祉ホームへ出むき健康面の支援
		<まどか>あったか荘の利用を1週間に→自活訓練事業につながる
4月		<まどか>自活訓練事業(国)実施 半年でまどかの利用者2名を対象に就労面、生活面の両面から援助プログラムを立て、事業展開→前後期合せて4名が実施その結果一名が就労の場の保障と共にGHへ移行
		<らいふ>児童・知的障害者・身体障害者居宅介護等事業(ホームヘルプサービス)を知多市と事業締結、受託運営開始、登録会員36名
		<らいふ>知的障害者生活訓練事業の受託、障害児・者在宅生活支援事業開始
9月	知的障害者短期入所事業、児童短期入所事業の受託	<ひかりのさと・のぞみの家>知的障害者短期入所事業、児童短期入所事業の受託
10月	グループホーム「おあしす」スタート 事業種別一知的障害者地域生活援助事業(国制度) 自立体験ステイの延長から自立へと一歩を踏み出す	<GH・生活ホーム>グループホーム「加木屋ホーム」「横根ホーム」開所、事業種別一知的障害者地域生活援助事業(国制度)
11月	第2回愛光園実践研究発表会、170名の参加者	
12月		<ファーム>東浦町高齢者対象の配食サービス委託終了(365日体制への条件整備できず)
2002(平成14)年	1月	<ファーム>今年の目標 1. 就労の場拡大→「自然養豚事業部」の新設・整備 2. 障害者の雇用支援センターの正式な立ち上げ→知多福祉エリアの就業・生活支援 3. 特別な支援を必要としている人への支援体制の構築→障害者プランを行政・福祉サービス・当事者団体が連携・策定・実施
	財団法人車両競技公益資金記念事業団からの助成	<ひかりのさと・のぞみの家>「各駅停車」グループの取り組み開始。給水管の付け替え工事
		<ひかりのさとの会>将来構想検討委員会設置
2001年度		<ファーム>知的障害者授産施設「ひかりのさとファーム」 1. 売り上げ2414万円、給料支給3万円(1月から2.5万円に減額)、一般就労への雇用支援実施による1名の一般事務所への就職実現、職員つき企業内就職やファームが短時間就労(業務委託契約を結び利用社が出向)→多様な働き方への開拓の有効性の確認 2. 事業展開 パン工房びいぶる事業部-1142万円、レストランくみ事業部-781万円、苜舎事業部(農業・食品加工)-427万円、ばくかめ事業部-64万円、700人の固定顧客 3. 「障害者雇用支援センター準備室」
		<らいふ>2001年度 (第2種社会福祉事業) 1. 児童・知的障害者・身体障害者居宅介護事業(ホームヘルプサービス) 2. 知的障害者地域生活援助事業(GHのバックアップ委託事業) (公益事業) 1. 知的障害者生活訓練事業 2. 障害児・者在宅生活支援事業 3. 障害児(者)地域療育等支援事業
		<ファーム>小規模授産施設「ひかりのさとファーム」→1. 売り上げ1963万円、給料支給3万円(1月から2.5万円に減額)、短時間就労実現、 2. 養鶏事業部-833万円、べんとうや事業部-211万円、よい食品事業部-919万

		円
		<p><くらいふ>事業概要 (1)障害児(者)地域療育支援事業 (1. 在宅支援外来療育指導事業 133回 429件 2. 在宅支援訪問療育指導事業 137回 734件 3. 施設一般指導事業 108回 878人 4. 地域生活支援事業(コーディネーター事業) (2)法人GH支援の実施(月70日)、知多半島の22GHと3生活ホームの世話人研修会(他の法人を含む)の実施(6回) (3)レスパイトサービスの実施(会員76名に対して4692件、10174時間)、(4)本人活動の企画運営の実施(なかよし会 6回)、(5)絵画教室</p>
	4月	<p><ひかりのさと・のぞみの家>市町村障害者生活支援事業開始(知多5市5町の相談事業)</p>